

Re:ゼロから始める帝督生活

元気マックスssさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『第二位』垣根帝督は『第一位』一方通行との激戦で瀕死の状態になってしまった。

彼が目を覚ました時、そこは全く別の『場所』だった。

目次

第一章 『怒涛の一日目』	
第一話 『《未元物質（ダークマター）》異世界へ』	1
第二話 『死んで巻き戻ってまた死んで』	6
第三話 『最高の悪党』	12
第四話 『悪党の翼』	22
第五話 『お月様が見てる』	27
第二章 『激動の一週間』	
第六話 『ロズワール邸にて』	32

第一章 『怒涛の一日目』

第一話 『《未元物質（ダークマター）》 異世界へ』

（が……ば、ア!!な、何が、一体何が……ッ!!）

死ぬ

「は、は」

死ぬ

『y j r p 悪 q w』

死ぬ

「ちくしょう。……テメエ、そういう事か!! テメエの役割は………ッ!!」

あ、死んだ……………。

目を閉じる寸前、あの声が聞こえた。

憎しみと悪が詰まった咆哮が。

それだ……………。テメエは悪党じゃなきや駄目なんだよ、最強最低の……な。

「ヴああ!」

（生きてんのか? 腕は……………ついでる）

「どういうこった?」

（いくら学園都市の医療、ましてや『冥土帰し』がいるとしても……………これは完治なんてあり得ねえ）

ここで垣根帝督は初めて周りを見る。

「はっ。」

思わず、間抜けな声が出る。

驚くのも無理はない、何故ならそこは………学園都市ではない別の『場所』。

周りは亜人のような生き物が歩いている。

竜のような生き物が荷台を運ぶという摩訶不思議な光景が見えてくる。

「どういう事だ？」

少なくとも周りの亜人は『能力開発』ではないだろう。

ましてや人と獣を合成する、という実験など成功したとは聞いてないしそのような実験をしたとも聞いてない。

垣根帝督はそこに茫然と立ち尽くすしか出来なかった。

垣根帝督は頭をフル回転させ考える。level5の第二位なのだ考えに考えてしまえばすぐに答えが出る。

そして、垣根帝督が推測したのは。

(『並行世界 (パラレルワールド)』の移動)

「たくっ、とうとう頭までメルヘン化したか？」

(だが、張り紙に書いてある文字もわかんねえ)

「とりあえず、ここを移動してみるか」

垣根帝督、帝督はそこから歩き続けると裏路地から声が出た。

「んだ？真っ昼間から喧嘩か？」

そこには三人が一人を囲んでタコ殴りしていた。

「はあ、どこに行っても無能な連中はいるんだな」

とりあえず、話しかけてみるか。

「おい」

「ああ？誰だテメエ」

(チビに中くらいにデブ………わかりやすい連中だな)

「そこをどけ、俺はそこで無様に倒れてる男に話があんだよ」

「テメエ、こいつの仲間か？」

「んなわけねえだろ、そんな雑魚と知り合いなわけねえ………俺はそ

の男に聞きてえ事があんだよ、わかつたらそこをどけ」

「さもねえと」

「見つけた！悪党！」

「ああ？」

「え？」

現れたのは、銀髪の女だった。

「と、とにかく！いい子だから、盗んだ貴章を返しなさい！」

「誰だ？テメエ、こいつを助けに来たんじゃねのか」

「誰？見ない格好してるわね、でもその人と関係ある？って言われても私は無関係って答えるわ、ていうか、さっさと盗んだ貴章を返しなさい！」

「し、知らねえよ、それなら、さつき走ってったガキじゃねえのか？」
「え、嘘、じゃないわね……………急がないと、でも、見過ごせる状況じゃないわね」

そうすると、銀髪美少女は両手を前に出すとそこには。

「なっ！」

氷の塊。

「魔法使いか！」

「な、なめんな！二対三で勝てっと思ってんのか！」

「二対三じゃないよ、にゃん」

(なんだ？あの猫)

「せ、『精霊』」

「おいおい、間違えんなよ……………四対三だろうが」ギロ

「ひ、ひい」

「逃げるぞ！」

チンピラ三人は怯えながら逃げていった。

「はあ、死ぬほど退屈な野郎だったぜ」

「あ、ありがと……………助かった」

「俺はテメエに聞きてえ事があっただけだ」

「私も貴方たちに聞きたい事があるんだけど」

「じゃあ、そっちが先でいい」

「わかったわ、じゃあ、貴方たちは私の貴章知らない？」

「え、えと、知らない」

(何、照れてやがんだ？こいつは)

「ほら、やましい事があるから目をそらしたんだ」

「ねえ、今のは、ただの男の子的反応ってだけで邪悪な感じはゼロだけ
ど」

「パツクは黙ってて」

「それで、貴方は？」

「ああ？悪いが俺もこれっぽっちも知らねえよ、つか、さっき来たばかりだったの」

「俺も期待されてるとこ悪いんだけど知らないよ」

「ええ？嘘、じゃあ、ただ回り道しただけ？」

「もう助けてもらったし、早く行った方がいい……いよ」

バタツと青年は倒れてしまう。

「で、どうする？」

「いいわよ、死ぬほどじゃないし、放っておくわよ」

「ホントにー？」

「ホントにー！……絶対の絶対に助けたりしないんだから！」

それからあれこれ猫と美少女の話が続いたのだが。

「結局、助けんじやねえか」

「これは情報を聞き出すためにやってるの！」

「ん、ああ、膝枕？……美少女の膝って意外と毛深いんだな

……って、んなわけあるか!？」

「って、なんかでかい！」

「うるせえ、耳に響くだろうが」

「つか、お前もいたのか、え」と

「垣根帝督」

「へえ、日本名だから意外と親近感がつて、ええ！」

「お、おま、お前もなのか！」

「ああ、そうだが？」

「いや、そうだが？って普通は同じ状況の人とか見たら驚くでしょ！」

「ああ、慣れつてのはこええな」

「慣れつて、お前」

「何話してるか知らないけど、そろそろこっちの話しを聞いてもらいたいんだけど」

「ああ、徽章の事か？それなら本当に知らない、けど、盗った奴なら見たぜ」

「そう、ならいいわ、貴方は私に情報をくれたんだし、これで貸し借りは無しね……………じゃあ」

「あ」

「ごめんねえ、素直じゃないんだ、あの子」

……………」

「何考えてんのか知らねえが、追いかけてえんだろ？」

「ああ……………あいつのあの生き方は損するばかりじゃないか！」

「たくつ、学園都市level5の第二位が聞いて呆れるぜ」

「？」

「ついていってやんよ、俺の目的の為にもな」

「よしっ！」

青年、菜月昴と第二位、垣根帝督は走る。

あの少女の元へ。

(待っている！『第一位(一方通行)』！必ず戻り、テメエを愉快な死体に変えてやるからよお！)

今、始まる。

憎しみと悪、そして『死』が詰まった。

……………異世界生活が……………

第二話 『死んで巻き戻ってまた死んで』

「おい、待ってくれよ!」

青年、菜月昴は美少女を呼び止める。

「なに? これ以上は私も少ししか付き合ってられないけど?」

「若干甘さ見えてるけど!? それより大切な物なんだろう? 俺達にも手伝わせてくれよ」

「でも、貴方たちは知らないって」

「姿だけは見たってさつきも言っただろう?」

「た、確かにそう言ってたわね、でも、片方が露骨に嫌そうな顔してるけど」

「え? あ! 本当だ!」

帝督の顔を見ると歯をギリギリと食いしばり面倒臭そうな顔をしていた。

「うっせえな、俺も本来ならテメエらを見捨ててそこから辺を愉快に探索するつもりだったんだよ」

「じゃあ、なんで?」

「チツ! テメエ、耳腐ってんのか? さつきも言っただろおが、俺にも目的があるって、その為には俺と同じ状況のテメエが必要なんだよ……… わかったらさつきとその徽章を探しに行くぞ」

「でも、闇雲に探して見つかるもんのか?」

「ああ? そうだな、少し考えればわかる事だろうが」

「え? 何が?」

「その徽章ってのは、落としたんじゃないかと、盗られたんだろ?」

「うん」

帝督は少し笑みを浮かべた。

「なら話しは簡単だ、盗ったって奴はその徽章を金にでもすんだろ? そうなりや、換金所のような場所にでも行くはずだ」

「なるほど! 確かにそうだな! でもその換金所ってのは?」

「このご時世だ……… スラムみたいのが多分あるだろ?」

銀髪美少女は首をかしげて言った。

「す、スラム？」

「金のねえ連中が集まったゴミクソみたいな集落だ」

「そ、それは流石に言いすぎなんじゃねえの？」

帝督は「うっせ」と言い、青年、菜月昴は「あれ？」と言う。

「俺達、まだまともに自己紹介してたくない？」

「俺はさつき名乗ったが？」

「いやいや、ていとくんじゃなく美少女だよ」

「おい、その名前やめねえと息の根を止めるぞ！10円のムシケラが」

「ええ！てかさらつと少し懐かしい響きが聞こえたような」

「つか、良いからさつきと名乗れ」

「おお、そうだったな！よしっ！

俺の名前はナツキ・スバル！無知蒙昧にして天下不滅の無一文！ヨロシク！」

「それだけ聞くともう絶対絶命だよ。うん、そして

ボクはパツク！ヨロシクー！」

スバルが差し出した手にパツクが飛び込む。

「おい猫を握り潰すなよ」

「いや、人間き悪いな！お前！」

「い、いたいよー」

「つて！パツクも乗るなよ！」

繰り出される精霊と人間二人の漫才に美少女が目を瞬かせる。

「精霊とこんなに気軽に接する人なんて本当に珍しい。………つて

言ったら二人の名前と髪と服装もだけど、どこから来たの？」

「それを聞かれると思ったぜ、俺の故郷は東の小つさい島国」

「同じく」

その回答に美少女は首をかしげる。

「ルグニカは大陸図で見て一番東の国だから………この国より東なんてないけど」

返ってきた言葉にスバルは驚愕の表情を浮かべる。

「ええ！嘘!?!ここが東の果て!?!じゃあ、ここが憧れのジパング!?!」

「今のを聞くと二人つてとても危ない状況なんじゃ……」

美少女は二人の事をじろじろと見つめると。

「こうして見ると二人つてかなりのいい出立ちでしょ？えつとスバルとテイトクは……………」

「おお、イエス俺の名前」

「そんなんじゃないやねえよ、こいつはどうかは知らねえが、少なくとも俺は家つて呼べるもんもねえし、あるのはアジトぐらいだな」

「アジト？」

「ていとくんはここに来る前はなんか組織的なのに所属でもしてたのか？」

「その呼び方やめろつて言っただろうが10円のムシケラがそうだな……………便利屋みたいなもんだな……………主に裏方のな」

「ええくなにそれ、意味深で怖っ……………なに？暗部的な？」

「ああ、よくわかったな」

「どんな事してんのか実にデリカシー無しな事聞いていいか？」

「好奇心大勢だな……………簡単に言うくと、殺し・略奪・拷問くらいか？」

「そんな事をさらつと口に出した帝督は二人と一匹の表情は固まっていた。」

「どうした？」

「いやいやいや!!どうした？じゃねえだろおお！」

「ああ？」

「いや!何、さらつとんでも無いこといつてんの!」

スバルはもの凄い叫び声にも似たような事を言い、パックは美少女を守るかのように出で、美少女は「あわわわ」と驚愕の表情を浮かべる。

「そうだな、いつもの俺なら口封じの為に殺すつていうお約束的な事をすんだが……………さつきも言ったように俺には俺の目的の為にテメエらが必要なんだよ」

「ほ、本当か？」

「ああ、つかさつさとテメエも名乗れよ」

「え?ああ、そうね……………私はサテラ、私の名前はサテラよ」

「うええ！」

「?」

パツクは驚きの表情を浮かべる、がそれに対しスバルは。

「サテラ、か………いい名前だ」

「え?」

パツクは美少女、サテラにヒソヒソと言う。

「趣味が悪いよ」

「終わったんなら、さっさと探しに行くぞ」

「お、おう」

「まだ、びびってんのか?くだんねえ」

「いや、それはお前のせいだからね!」

三人と一匹は話しを終わってスラムもとい貧民街を探しに行った、その途中、サテラのお節介で迷子を助けたりしたがその後も徽章探しは続いた。

そして、情報を聞き出すために商店街に戻ってきたのだが。

「なんだ?またお前か、無一文」

「テメエの知り合いか?」

「まあな」

スバルは店主にチツチツチーと言い出し。

「今の俺は一味違うぜ?」

「ん?」

「ほら見ろ!連れだよ!連れ!」

「話してる所悪いんだけど、スバル、私も一円も持ってないよ?」

「悪いが、俺もだ」

「ええ!」

「無一文が増えただけじゃねえか」

「え、えええ」

すると突然声をかけられ。

「貴方がたは」

「ん?ああ、さっきの迷子の」

「はい、先程はどうも、ありがとうございます」

声を掛けて来たのは迷子の女の子のお母さんだった。

「なんだ？知り合いか？」

「ええ、さつきこの子が迷子になってね、助けてもらったの」

「え？あんたら知り合い？」

「ええ、うちの主人です」

「ええ！」

迷子の女の子が店主に抱きつき。

「パパ」

「マジか」

店主は少し困ったように言う。

「さつきはすまなかつたな、恩人なら仕方ねえ」

「いや、いいんだよ」

スバルたちは店主に話しを言うと。

「こいつはフェルトだな」

「フェルト？」

「ああ、貧民街の奴でな、この辺りじゃあ有名だよ」

「そうか……で、その貧民街はどこにあるんだ？」

「ああ、貧民街はこの街のハズレにあるよ」

「ああ、ありがとう、次はリング買わせて貰うぜ」

「おお、それなら客人だ！」

「じゃあな、よし、行くか！」

スバル一行は言われた通りに進み、貧民街に着いた。

「いくら貧民街といえどフェルトの居場所がわからねえとなあ」

「予想はしてたが、やはり空気が重てえな」

「避けられてるみたいね」

「まあ、触らぬ神に祟りなして所か……でもこれじゃあ埒があかないなあ……人に聞かか」

「え、ちよつとスバル」

「へい兄弟！こころに辺にフェルトって奴がいるはずなんだけど何処にいるか知らない？」

とスバルは気軽に見知らぬ男に話しかけた。

「……………おう、フェルトの奴ならこの先にある盗品蔵にいる

と思うぜ、兄弟！

「おう！ありがとな」

『強く生きろよ』

「おう」

数分後。

「てな訳で、言われた通りに道を進んで来たけど……ここが盗品蔵か？ボロいな」

盗品蔵はまるで廃墟のような場所だった。

「なんか出そうだな」

(んだ？この嫌な予感は……これは『闇』だ)

帝督は長年、闇に関わっていた、学園都市ほどではないがこれはヤバイと帝督の頭がそう警告していた。

「ダメだ」

「え？」

「これは……相等ヤバイことになってやがる」

「どういう意味だよ？」

「勘だ」

帝督は今まで面倒臭そうな顔をしていたが今は真剣な顔をしていった。

「わ、わかった」

ドサツと何かが倒れた音がした。

スバルが後ろを振り向く。

「どうし……し……した」

不意に全身の力が無くなる。

「え？」

その光景は三人が血だらけで倒れている光景だ。

スバルはサテラと帝督の手を握る。

待っている。

俺が 必ず 救って や る。

第三話 『最高の悪党』

「ヴああー！」

「ハア……ハア……ハア」

おかしい、という言葉が頭の中でグルグルと回転している。

(さっきまで……夜だった……よな?)

学園都市、level5の第二位である垣根帝督の頭でさえ、理解不能。

先程まで帝督はスバルとサテラと猫(名前は盛大に忘れてる)と一緒に盗品蔵の扉前にいたのだが。

(なんだ?何か忘れてる様な………ツ!)

思い出した。

先程までの事。

それは残酷な思い出。

『腸』を切られた。

ただ、それだけ。

それならば、何故ここにいるのか、大抵の人間は死ぬし実際、目を閉じる寸前見てしまった。

二人が腸を切られる一瞬を。

やめてしまおう。

考えるのを。

「チッーんだよ………」

帝督はとりあえず考えるのをやめて街を歩く事にした、暫く歩いていると、見覚えのある場所へ到着する。

「ここは……あの路地裏か」

少し、進むと話し声が聞こえてくる、聞き覚えのある声だ。

「お前ら……ひよつとして、俺の知らない所で頭でも打った?」

その声が出た時、少しはや歩きして現場へ向かったが、着いた時はすでに事は終わっていた。

「おい」

「ん？俺は急いでつてえ!!ていとくん!!」

「よお、これテメエが殺つたのか？」

「いや、流石に殺してはねえよ」

「そうか……………テメエも気づいてるか？」

帝督はスバルに真剣な顔をして質問した。

「ん？まあな、俺はまだ少し混乱してるっていうのが本音だけど、急がねえとサテラが死んじまう！」

「とりあえず盗品蔵へ行くか……………」

帝督とスバルは走りながら貧民街へ向かい到着したのだが。

「やべえ、覚えてねえ」

「んだよ、テメエもか？」

「いや、その、サテラの顔に見とれてたら」

「そんなくだんねえ言い訳してんじゃねえよ」

スバルはニヤニヤと笑っていたが、帝督は「使えねえ〜」などと言っていた。

「じゃ、じゃあ！そんなていとくんはなんで道を覚えてねんだよ！」

「考え事だ、考え事」

「考える事?..」

その時の帝督は。

—————回想—————

(ああ、第一位、殺してえな、滅茶苦茶に殺してえ、目の前で『最終信号(ラストオーダー)』殺して、苦しませて……………やべえ、元の世界に帰るのが楽しみで仕方ねえ……………フッフッフ)

—————回想終了—————

などと、帰ったらどうしようか、と考えていた。

「つか、もう面倒くせえし、二手に別れるぞ」

「お、おう」

「テメエはあっちを、俺は逆の方を、じゃあな」

とりあえず、二手に別れて数時間が立った。

(ああ、もう跳んで行くか?……………いや、いくら貧民街とはいえこんな公の場でポンポン能力使うのはやめといた方がいいか)

そんな事を考えてると。

「ん？着いたな」

一步、踏み込む。

次の瞬間、身体に悪寒が走る。

（んだーこれは！）

喋れない、動けない。

次第に背後から黒い靄が自身の身体に纏いつくように広がる、そこから黒い手が出てくる。

（おい、なんの冗談だ？畜生）

その黒い手は帝督の心臓を握りしめた。

（ヴー！あああ!!）

マブタが自然に閉じる。

「ヴああ！」

「ハア……………ハア……………ハア……………」

意識が覚醒した時、そこは最初にいた場所だった。

意味が分からない、理解が出来ない。

（何なんだ！一体!?何なんだよ！畜生!?!）

「ふぎ……………けんな！」

ボソリとそう呟く。

怒りの感情に浸っている時、ザワザワと近くに人の溜まり場が出来ていた。

今は適当に八つ当たりしたい気分だがどうも溜まり場にいる人たちの顔が真剣だったので、帝督はその中へと入っていった。

（あれは……………ムシケラとサテラ、か）

サテラの方は、非常に怒った顔をしていたがそれに対しスバルは絶望的な表情を浮かべていた。

そして、サテラが去ろうとしたその瞬間。

金髪の髪をした小柄な少女が降りてきた。

（誰だ？あいつ……………ツ！）

驚いた、その小柄な少女は凄イスピードで走り、サテラの衣服に触れる。

(なるほど……………ああやって盗られたのか、となると、アイツが例のフェルトか)

「まさか……………!」

サテラが驚愕の声を上げ、己のローブの内に手を入れる。

が、そこに目的の物が無いのか見開くサテラの目が追うのは急速に遠ざかるフェルトの行方。

フェルトの手の握られてたのは竜を象った徽章、そして後ろ姿を見てとつさにスバルは叫ぶ。

「フェルト!?!」

がもうそこにフェルトはいない。

サテラは先程よりも険しい表情でスバルに言った。

「やられたっ。このための足止め……………貴方もグル!?!」

サテラはそう叫び、とつさに走り出す。

「おい、待て! 誤解だ! 俺は……………っ」

とスバルも走り出す。

帝督はそれを追って、路地裏に入るが。

まただ。

喋れず、動けず。

黒い靄が広がる。

(な、に?!)

黒い手が帝督の心臓を握りしめる。

(ヴああ! あああ!! クソっ! な、んなん、だ……………)

「ヴうう!」

「ハア……………もう本当に理解、できねえ」

「んあ?…ここはさっきの」

辺りを見渡すがそこは一番最初にいた所ではなく、人だかりが出来ていた場所だった。

「とりあえず、ムシケラを探すか」

歩いて10分、いつの間にかあの路地裏に来ていた。

そこには思った通りスバルがいたがどうやら一人ではない、そこにいたのは赤毛、青目で腰には装飾が施された剣だった。

「よお、随分と探したがやっぱここにいたか」

「ていとくん!？」

「おや?知り合いかい?」

(誰だ?なんか凄い爽やかな奴だな)

帝督はスバルに事情を聞かされた。

『『劍聖』ラインハルト、か』

「そういえば、さつきも『劍聖』って呼ばれてた気がするが……………」
「家が少しだけ特殊でね、かけられた期待の重さに潰れそうな日々だとも」

肩をすくめて気軽さを見せる。

「二人とも珍しい髪と服装、それに名前だけど、二人はどこから?」

……………王都ルグニカにはどんな理由で来たんだい?」

「ここより、東の小国だよ」

「同じく」

二人の答えにラインハルトは眉を上げて驚く。

「ルグニカより東……………まさか、大瀑布の向こうって冗談かい?」

知らない単語が出てきた。

「大瀑布?」

「誤魔化してるってわけでもないようだけど、そこはいいか。とにかく王都の人間じゃないのは確かなようだけど、なにか理由のあつての事だろうか?今のルグニカは平時より少し落ち着かない状況にある。僕で良ければ手伝うけど」

「いやいや、休日なんだろう?それに返上してまで俺達の手伝いなんてすることねえよ。さつきので十分……………だけど、ついでにちよこーつと聞きたい事がある」

ラインハルトの申し出には首を振って断ったが、スバルは指を立てる。

「なんでも聞いてくれ。世間には疎い方だから、答えられるかわらな
いけどね」

「いや、聞きたい事ってのは人探しだから大丈夫、ってなわけで聞きた
いんだけど、この辺りで白いローブを着た銀髪の美少女って見てない

？」

「白いローブに銀髪の美少女………すまない、心当たりはないな、けど、会ってどうするんだい？」

「落とし物、ではないな探し物を届けたいんだ」

「良ければ、手伝うけど」

「大丈夫だ、あとは俺達で探すから」

「そうかい」

スバルは付け加えたようにラインハルトに言う。

「あああと、その銀髪の美少女に会ったら伝えて欲しいんだけど………」

「なんだい？」

「絶対に貧民街の盗品蔵には危ないから行くな、探し物は必ず俺達が届ける』って」

「ん？よくわからないけど会えたら伝えておくよ」

「うん、じゃあな！……この礼はいずれ」

「ああ、また会おう、スバル」

「話しは終わったか？」

「ああ、それじゃあ行こう」

最後にラインハルトは二人に「気をつけて」と言っていた。

その言葉に押されて、二人は無傷の阻害ゼロで路地裏から脱出を果たす。

その背中を青い双眸が、値踏みするように見ていることには気付かずに。

その後、帝督はスバルに状況を知らされた。

二人は死ぬとタイムリープする『死に戻り』を有している事。

だが帝督は一番最初の盗品蔵でしか死んでいない、帝督が推測するにこれは片方が死ぬばもう片方も戻ってしまうということ。

そして、サテラという名は偽名である事。

最後に盗品蔵での死因はエルザという女が仕出かした事。

だが、帝督はそれどころではない、帝督は今、内心怒りで満ちている。

何故なら最初の死因が女に殺されたという事、帝督は学園都市に七人しかいないとされるlevel5の第二位に君臨する男だ。

あの時は、完全に油断していたとはいえ帝督はそれが一番許せなかった。

場面は代わって貧民街。

二人はフェルトの寢床を住民に聞き、今はその寢床に向かっている途中。

そんな中、スバルは前を見てなかったのか誰かとぶつかった。

(何やってんだ？こいつは)

「あら、ごめんなさい大丈夫かしら？」

その質問にスバルは回答するが。

「大丈夫大丈夫。こう見えても俺って丈夫なのが取り柄……………ッ
!？」

(んだ？ムシケラの野郎、何びびってやがる？)

「ふふ、楽しい子ね。それで本当に大丈夫？」

(まさか、こいつが俺を……………)

今、二人の前にいるのはエルザだった。

「そんなに恐がらなくても、何もしないのだけれど」

「こわ……………恐がるとか、してねえよ？何を根拠にそんなこと」

「臭い」

「？」

「恐がつてるとき、その人からは恐がつてる臭いがするものよ。貴方は今、恐がつている……………それから、怒ってもいるわね。私に対して……………そして、隣の貴方も私に対してもものすごく怒っているわね……………少し気にかかるのだけれど、いいわ。今は騒ぎを起こすわけにはいかないから」

「お、穏当じゃない発言だな。あんましビビらせると美人が台無しだぜ？……………ッ！」

「あら、お上手。……………敵意が隠せればもつと上出来よ」

(ムシケラの野郎、相当びびってやがるな)

帝督は今、怒り心頭だった。

それは、自分を殺したからなどではなく。

自分がこんな格下に殺られたのかと怒っていたのだ。

「それじゃあ、失礼するわ。また会えそうな気がするわね」

そう言っただけでエルザは去っていった。

二人はフェルトの寢床の着くとそこは寢床、というよりホームレスが住んでるかの様な小さ過ぎる小屋だった。

(んだよこれ？まるで『無能力者(スキルアウト)』の住処みてえだな)

「誰だ？兄ちゃん達」

後ろを振り向くとそこにはあのフェルトがいた。

その後、いざこざがあつたがフェルトを説得し、盗品蔵へと向かった。

今、現在は盗品蔵の室内。

帝督はエルザと出会ってからもすごく退屈であった。

フェルトは関係者だの、騙されねえだのと騒いでいて、それに対してスバルは困ったような徽章を渡すよう説得している。

(つまんねえ)

交渉は失敗、だがその時ロム爺は表情を変えて入り口を睨んだ。

「……………誰じゃ？」

(やっと、来たか？あの格下は)

「アタシの客かもしれないねー。まだ早い気がするけど」

その時、扉はノックされた。

(ムシケラの野郎、まだびびってんのか？)

「……………開けるな！殺されるぞ!!」

だがスバルの忠告を無視してフェルトは扉を躊躇なく開ける。

現れたのは。

「……………殺すとか、そんなおつかないこと、いきなりしないわよ」

二人がよく知る、銀髪の美少女だった。

「よかった、いてくれて。……………今度は逃がさないから」

「本当にしつつけー女だな、アンタ。いい加減諦めろっつーのに！」

「残念だけど、諦められない物だから。……………大人しくすれば、痛い思いはさせないわ」

と銀髪美少女は両手を前にかざし氷の氷柱を出した。

「私からの要求は一つ、あの徽章を返してただそれだけ」

「……………ロム爺」

「動けん、厄介事を厄介な者と一緒に持つてきたなフェルト」

「ケンカやる前から負け認めんのかよ!?!」

「ただの魔法使いなら僕も引いたりせん……………だが、この相手はマズイー……………お嬢ちゃん、あんた、エルフじゃろ?」

「正しくは違う。……………私がエルフなのは半分だけだから」

「ハーフェルフ、それも銀髪!?!まさか……………ッ!」

「他人の空似よ!私だつて迷惑してるもの!」

(つまんねえ)

そして、フェルトはスバルの方を見て。

「兄ちゃん、はめたな?」

「なに?」

「持ち主に返すとかおかしな事を言いやがるから怪しいとは思ってたんだ!」

とぼつちりをうけたスバルは困ったような顔をして、帝督はつまんねえと見ただけでわかるような佇まい。

銀髪美少女が首をかしげて。

「?……………どういう事?貴方達、仲間じゃないの?」

「小芝居すんなよ。」

スバルははあとため息をつき。

「まあまあ、ややこしくなるからいいじやねえの盗った徽章、返してやれよ」

「なんで急に親身になってくれるの?私、すごく釈然としないんだけど……………」

「納得いかねえのはアタシも一緒だよ」

「フェルト、早まるでないぞ」

スバルは女性陣から痛い目を向けられるのだが。

スバルは気付いた。

「ッ!!パック!防げ!」

繰り返された攻撃は氷の盾によって守られた。

「なかなかどうして、紙一重なタイミングだよ、助かったよ」
「助かったのはむしろこっちだ、ありがとうパック」

その時だった。

悪党が動き出す。

「クククク」

「帝督?」

「アッハッハッハ!!」

笑う帝督。

笑う悪党。

「あらあら、私は笑う様な事なんてした覚えはないのだけれど」

「いやいや、十分笑えたぜえ……………格下あ?」

「随分となめられた者ね」

「頭にのってるな、よほど愉快的死体になりたいらしいな? 悪党さん
よお」

「確かに私は悪党だけれど、見る限り貴方も……………よほど凄い悪党
なのね」

「ああ、そうだな……………いいぜえ見せてやるよ『新人』!」

「『最高の悪党』をな!」

そこにいる誰もが驚いた。

『最高の悪党』を名乗る。

垣根帝督の背中にあるものが現れたからだ。

「す、すげえ」

「あらあら、貴方、面白い物をつけているのね」

「なんと!」

今、『未元物質（ダークマター）』が発動した。

第四話 『悪党の翼』

その場の全員が驚愕していた。

『最高の悪党』である垣根帝督の背中に六枚の発光する翼が生えていた。

「先に言っておくぜ、『新人』……………俺の『未元物質（ダークマター）』に常識は通用しねえ」

「あらあら、それは楽しみだわ」

エルザは「ふふ」と笑い、舌で唇をなめる仕草をする。

シユンツと音がなった、常人ではあり得ない速さでエルザは特徴的な短剣を構え特攻してくる。

が、しかし。

「無駄だ……………」

帝督は翼で身を守り、エルザの短剣で貫く事はできなかった。

「その翼、もの凄く硬いのだけれど……………もぎ取る事はできないのかしら？」

「残念だな……………この翼は俺の体の一部じゃねえ、簡単に言えばこれは発現すんだ」

「そう……………それでも後の味わいがあつていいわ……………でもそんな性格して似合わない物を持っているのね」

「心配すんな、自覚はある」

エルザが短剣で高速の攻撃に帝督は翼で防御、若干、帝督が押されるように見えるがそれでもない、帝督は余裕の面構えである。

「でも、やっぱりその翼はとても硬いのだけれど……………生き物が持つ翼はみなそういう物なの？」

「じゃあねえ、勉強タイムといこう」

帝督はエルザの攻撃を防ぎながら喋り出す。

「俺の能力『未元物質（ダークマター）』は「まだ見つかってない」だの「理論上存在するはずの物質」だのじゃなく本当にこの世に存在しない物質を作り出したまたは引き出す……………それをどういう意味を表すか、わかるか？」

「悪いけど、私は余りそういうのに詳しくないのだけれど」

後ろで驚きながらも戦いを見守ってる銀髪美少女がスバルにヒソヒソと話していた。

「どういう意味なの？」

「うーん、多分それは………ごめんわかんない」

「まあ、いいさ……答え合わせだ、正解はこの世の物理法則に従わないという意味だ、そうだな『太陽光Ⅱ殺人光線』って考えときゃいい」

「それは恐ろしいわね」

「ああ、あと」

「なあに？」

瞬間、何かが飛んだ。

「殺し合いの途中で余所見すんなよ。格下」

「あらあら、これはしてやられたって言うのかしら？」

エルザの左腕は無い。

が、エルザは顔をほんのり赤くして言った。

「今のは『感じたわ』」

「聞いてねえぞ！帝督！」

（こいつも亜人か何かなのか？）

「私は少し、特殊な加護を持っているのだけれど、首を跳ねないと私は死なないわ」

（加護？）

帝督は六枚の翼を使い烈風を出した。

「おらおらー！どうした？格下があー！」

烈風を受けたエルザは所々血だらけだった。

それでも足りない。

試したい。

この世界で『未元物質（ダークマター）』は最強になれるか。知りたい。

試したい。

「そのためにも！俺の糧になりやがれえ!!経験値！」

一枚の翼がエルザの体を跳ばした

ズドオン!!!という鈍い轟音を鳴らした。

エルザの姿が見当たらない。

「か、勝った……勝ったぞ!」

とフェルトがそう叫ぶが。

「馬鹿!それフラ………」

ズドンと天上から音がした。

天上から現れたのはエルザだった。

エルザは銀髪美少女目掛けてものすごい勢いで降りてきたが

……それを誰かが受け止めた。

「そこまでだ」

一人の男が盗品蔵の中央から出てきたのは……『剣聖』

「んあ? テメエは『剣聖』………の奴だな」

「ちゃんと自己紹介したんだけど………名前は盛大に忘れてるんだね、それはこちらとしては少し悲しいところでもあるんだけど、どうやら苦戦はしなかったみたいだね」

ラインハルトは困ったように言うがそれに対してスバルは。

「ラインハルト! どうしてここに?」

「やあスバル………そして、どうやら僕の友達がお世話になったね」

「あああら、今日は楽しいごとつぐしね………その竜の騎士剣………そう『剣聖』の家系ね、『剣聖』ラインハルト、でもこれだと分が悪いのだけれど、最後にこうしておくのも悪くないわね」

そして、エルザがとった行動は………美少女への攻撃だった。

「あぶなっ!!」

スバルがとつさに美少女を押しして、偶然床に転がっていた棍棒を盾にする。

「チッ! この子はまた邪魔をして」

エルザは悪態をつき、切断された左腕を持って逃げていった。

「あ、あぶねえ……腰が抜けたぜ」

とスバルは尻餅をつくがラインハルトが手を差しのべる。

「大丈夫かい?」

「あ、悪い……でもなんでお前が?」

「いや、貧民街の盗品蔵には危ないから近づくなという言葉を聞いたんだ、いくら非番といえ騎士として見過ごせないよ」

ラインハルトは苦笑するがスバルは頭を下げる。

「悪い、また助けてもらったな」

「いいんだよ、友達、なんだろう?」

「ああ」

スバルはにこりと笑い、テーブルの上で立っている帝督を見上げた。

「大丈夫か? ていとくん」

「まあな、つかあんな格下の糞女にやられると思ってるのか?」

「あ、あははは……つと」

スバルはオドオドした美少女を見て言う。

というか大声で。

「俺の名前はナツキ・スバル! 色々と言いたいことも聞きたいことも山ほどあるけど! それはとりあえずおいといてまず聞こう!」

「な、なによ……」

「俺つてば、今まさに君を凶刃から守り抜いた命の恩人! ここまでオーケー!?!」

「おーけー?」

「よろしいですかの意、つてなわけでオーケー!?!」

「お、おーけー」

「前置きが長い早くしろよ、ムシケラが」

「ちよ、良いところなんだから!……わかったよ! 君を助けた俺! なにか見返りがあっていいんじゃない?」

「わ、わかったわよ、私にできる範囲なら」

「そうか、なら俺の願いは一つだけ」

スバルは指パッチンし声を低くしてこう言った。

「君の名前を覚えてほしい」

沈黙が現れた。

「ふふ」

「ん?」

美少女は静かに笑いながら言う。

「……エミリア」

「え？」

「私の名前はエミリア。ただのエミリアよ。ありがとうスバル、ていとくん」

「おいそれは俺の名前じゃねえぞ」

それから談笑は続いた。

がスバルには不幸が訪れる。

スバルの腹には赤色の線がにじみ出ている。

「あ、これ俺にも先が読めたわ」

腹から血を吹き出し、スバルは倒れる。

「スバル!!」

「ムシケラ」

が銀髪美少女、エミリアの迅速な治療のおかげでスバルは助かった。

第五話 『お月様が見てる』

「よし……………もう大丈夫」

以前よりも更にボロボロになった盗品蔵を綺麗に闇を照らす満月がそこを照らす。

「治ったのか？」

「うん、治療は完了。……………どうにか峠は超えたでしょ」

エミリアは「ふう」とホッとしたように胸を撫で下ろす

「それで？さっき襲って来た……………あの糞女は一体何もんだ？」

テイトクはラインハルトに質問を問い掛けるとラインハルトは少し、眉間にシワをよせ真剣な眼差しで質問を問う。

「あの北国特有の短剣、そしてあの身のこなし……………あれは最近こちらで目撃されている腸狩りという暗殺者だよ」

『腸狩り』聞いただけでも物騒と分かる名前だ。

「腸狩りはその名前の通り、敵の腸を切るという特徴的な殺し方で有名なんだ」

かくいうスバルも治療はしたが腸を切られた。

そして、ラインハルトは続けてテイトクに問う。

「でも……………どうやってあの腸狩りに致命傷を与えたんだい？」

その言葉にエミリアは続けて言った。

「すごく凄かったんだよ！こう…翼がバアツとなつてて」

「翼？」

突然の意味不明な発言にラインハルトは首を傾げてテイトクを見る。

「こつちの話しだ、気にすんな」

だが、テイトクはそんな事どうでもいいかの如く、受け流す。

「そういえば、どうやってここまで？」

エミリアは首を傾げてラインハルトに助けに来た経緯を問い掛ける。

「ええ、その事なのですが、彼……………スバルがエミリア様を見つけ次第、盗品蔵へは危ないから近づくなと忠告してくれと言われまして、友達

が危ない橋を渡ろうとしているのですし、助けるのは当たり前だと思
い、ここまでやって来た次第です」

ラインハルトは長々と説明するが、テイトクはすべて耳から耳へ流
していた。

「そして、エミリア様……スバルとテイトクとはどういうご関係な
のですか？」

「行きずり」

ラインハルトはその言葉を聞くとテイトクの方を見る。

「チツ……いちいちこつちに振んなよな、確かにテメエの言った通り
俺達とテメエはここで初めて会ったさ」

「でも……それじゃあなんで？」

「まあ、元々はコイツの一目惚れのせいまでここまで来ただけだ」

テイトクはエミリアの顔をニヤつとした顔で睨む。

それを察したのかラインハルトはニツコリしながらスバルとエミ
リアを見る。

「愛ゆえにという事かい？」

「そうそう……愛ゆえに、だ」

「え？なに？何でこつちを見るの？」

そして、気を取り直してエミリアはラインハルトにこう言った。

「それで、ここの扱いはどうなるの？」

「付近はしばらく立ち入り禁止にして、しばらくは彼女……腸狩りの
手配書を出します。もともと後ろ暗い噂の絶えない人物なので、無駄
骨になる可能性の方が高いですが」

次にエミリアは横になっているロム爺とロム爺を見つめるフェル
トへ視線を向ける。

「あの女の子とお爺さんはどうなるの？」

「……事情はわかりかねますが、彼女やこのご老体のやっていたこと
は自分の職務上、見逃す事はできない部類であると考えます。です
が」

間を開けて息継ぎ、ラインハルトは小さく肩をすくめる。

「自分は先程も申した通り非番でして。付け加えて、被害者が被害を

訴えない場合、証拠不十分でこれも難しい。はは。いえまったく、事情はわかりかねますが」

「ふふっ、悪い騎士様ね」

「まったくだな」

「恐れ多くも、これが騎士の中の騎士なんて呼ばれている男の本性ですよ」

エミリアは口元に手を当てて笑い、それに対しテイトクは目を瞑りハアとため息をこぼす。

そして、エミリアはフェルトの元へ歩き出す。

「そのお爺さんは、貴女の家族？」

エミリアはしゃがんでいるフェルトの目線と合わせて問い掛ける。

「そ、そーみたいなものだ。ロム爺はアタシにとつて、たった一人の………うん、じーちゃんみてーなものだな」

「そう。私の家族も一人だけ。肝心な時に眠りこけてるし、起きてる時もは絶対にそんな事は言えないけど」

「アタシだって、起きてるロム爺にこんな事言えねーよ」

フェルトはエミリアを見上げてその赤い双眸に弱々しい光を灯した。

「もつと……きつくくると思ってた」

「そう、ね。さつきまでのままなら、そうだったかもしれないけど。毒気抜かれちゃったのかもね。だから少しだけど、あの子の顔に免じてあげる」

エミリアはその言葉と同時に肩をすくめる。

「命を助けてもらったんだ。恩知らずな真似はできねー。盗ったものは返す」

「ん。そうしてもらえると助かるわ。私もこのお兄さん達をけしかけるのはすごーく気が咎めるから」

エミリアはラインハルトとテイトクを手で示す。

「アタシも騎士の中の騎士に硬い翼の兄ちゃんと追いかけてっこなんて正気じゃねー」

その言葉にラインハルトは優しく微笑み、対してテイトクはチツと

舌を鳴らしてそっぽを向く。

「んじや、返す。……大事なもんなら、今度から盗られねーようにちやんと隠せよ」

「貴女にその忠告をされるのってヘンテコな気分ね。……できれば、今回だけじゃなくてももうこんな事はやめてほしいんだけど」

とエミリアは困ったように苦笑し、ラインハルトもそれを見て微笑む。

がその微笑みも一瞬で真剣な眼差しに変わる事となった。

「ほらよ」

とフェルトが自分の懐から手に出したのはあの徽章だった。

それを見たラインハルトはフェルトの華奢な腕を掴み、その徽章を手に取り確かめていた。

「ラインハルト？」

「どうした？キザ野郎」

この行動には流石のテイトクも驚いた。

「い、痛いっつの………放して……」

ラインハルトは徽章を見て驚愕の表情を浮かべた。

「なんて事だ………」

「待って。ラインハルト。確かに、お咎めなしですませるのが難しい事なのはわかってるの。でも、この子は徽章の価値を知らなかったのよ。そして盗られた私自身はそれを問題にしてない。盗られた私に落ち度があった事だから。だから………」

「違います、エミリア様。僕が問題にしているのは、そんなことじゃない」

テイトクはそんなヤリトリをつまらなそうに見ていたがどうやらこのフェルトにはなにかしらあるのかもしれないと推測していた。

「君の名前は？」

「ふえ、フェルト………だ」

「家名は？年齢はいくつだい？」

（やはり何かあんのか）

「こ、孤独だぜ？家名なんて大層なもんは持っちゃいねーよ。年は

……たぶん十五ぐらいって話だ。誕生日がわかんねーから。つつか、放せよ！」

(なるほど、所謂『置き去りの子(チャイルドエラー)』って奴か……ここが学園都市なら暗部に引き渡されるか実験の『被験者(モルモット)』にされる所だな)

「エミリア様、先程のお約束は守れなくなりました。……彼女の身柄は自分が預からせていただきます」

「理由を聞いても？ 徽章盗難での罰というなら」

「それも決して小さくない罪ですが……今、こうして目の前の光景を見過ごす事の罪深さと比べれば些細な事に過ぎません………ついできてもらいたい。すまないが、君に拒否権は与えられない」

「ふざけ……助けたからってあんまり調子に……っ」

ラインハルトがフェルトの顔に手をかざすとフェルトはまるで操り人形の糸が切れたのか如く気を失う。

(これも魔法って奴か)

「また騎士様らしくないやり方……」

そして、ラインハルトは手にした徽章をエミリアの差し出しこう告げる。

「……エミリア様、また近いうちに呼び出しがあるかと思われます。ご理解を」

そして、ラインハルトは横になっているスバルを見て、エミリアに顔を向ける。

「スバルの事を、どうかよろしくお願いします」

そして、ラインハルトはエミリアに一礼をし、気絶したフェルトを連れ去る。

そして、ラインハルトは青白く闇を優しく照らす満月に向かい、囁いた。

「落ち着いて月を見れるのは、今日が最後かもしれない………」

その後、テイトクは気絶したスバルを連れエミリアについていき『メイザース領』へと向かった。

第二章 『激動の一週間』 第六話 『ロズワール邸にて』

竜車という馬車のような物に乗っていた最中、スバルは相変わらず寝ている。

そんな中テイトクも眠りにつこうとしていた。

「……………おい」

「ん？」

突然の問い掛けにビックリしたのか汗をかきながらエミリアはテイトクへ視線を向ける。

「悪いがこっちも寝る……………目的地に着いたら教えろ」

「……………うん」

話し相手が寝るのが少し寂しく感じたのかエミリアは少し間を空けて返事をする。

(……………そういえばコイツらには一日にしか感じねえのか俺には倍に感じたぜ……………畜生)

そうしてテイトクは目を瞑り深い眠りへとつく。

……………
「……………だ……………れ……………？」

(んあ?)

『あ……………たは……………、よ……………でな……………い』

(なんだ?)

『違う……………あなたじゃ』

次の瞬間、テイトクはゆっくりと瞼を開ける。

「…………………………チツ」

この舌打ちには理由があった、一つ目は目覚めが悪いのと二つ目は目的地に着いた時に起こしてくれなかったことに少しイラついていた。

周りを見渡す限り、ここは間違いなく豪邸だろう。

何故なら明らかに品質が高級なベットに寝かされていたのと部屋の装飾が豪華すぎる。

(まあ、寝ていたうちに『メイザース領』とやらに着いたんだろう) その時だった、コンコンとドアがノックされる、そしてそのドアが勢いよく開きそこから出てきたのは。

「おっはよーすー！ていとくん！起きてっかー？」

出てきたのはスバルだった。

「チツ……テメエか、朝から叫ぶんじゃねえよ。こちとら目覚めが悪いんだ」

とテイトクは渋々ベットから起きる。

「おはよう、テイトク」

そして、続いて出てきたのはエミリアだった。

「おい、着いたら教えろつつたろおが」

「ゴメン、あんまりにもスヤスヤ寝てるものだから」

テイトクは「ハア」とため息をこぼすがまた誰かがやってくる。

出てきたのは、メイドだった。

紅い瞳と髪色をしたメイドと青い瞳と髪色をしたメイドが口を揃って言い出す。

「おはようございます。お客様」

「誰だ？テメエらは」

テイトクは少し警戒心を強め睨みつける。

「当家ロズワール邸の当主ロズワール様に使える使用人」

「ラムです」

「レムです」

(使用人……紅い方がラムで青い方がレム……双子か？わかりやすいというか、わかりづらいというか)

テイトクはラムとレムをまじまじと見つめる、二人がこそこそと話している。

「姉様姉様、あの方は先程からレムと姉様を見つめているのですが、あの方も目付きの悪い方と同じ女性の体を見つめて興奮する困った方？」

「レムレム、あの目付きの悪い二人には近づかない方がいいわ、じやない」と襲われるかもしれない」

すべて、聞こえているテイトク。

「おい、あんまり舐めた態度とるとぶっ殺すぞ」

ぶっ殺すという言葉にレムは怪しげな者を見るようにテイトクを睨みつける。

「おいおい、朝っぱらから喧嘩すんなって〜」

「黙れ、ムシケラ」

「まあまあ、ほらていとくん！エミリアや俺とパツクと外行こうぜ！」

スバルはバンバンとテイトクの背中を叩く。

「チツ！……………ムカツク」

「ほ、ほら、ね？早く行こ？」

『んく、レムとていとくんは相性が悪いのかな』

所変わって庭。

三人と一匹は地面に座って話していた。

「そういえばていとくん、朝起きたっけすげえ口の悪いロリがいたんだよ！」

スバルは元気に話しているのをエミリアは真剣に聞いていたがテイトクは案の定聞き逃している。

（魔法……………だっけか？あれを習得すれば俺の。

『未元物質（ダークマター）』に 응용できんのか？）

「ねえ、ちよつと……………聞いてますか？ていとくん……………おい、ていとくん？聞こえましたか？三下！」

「んだよ！こちとら今頭の中で色々と考えてんだよ！テメエは一秒でも黙れねえのか？三下！」

「さ、三下って何もそこまで言わなくても……………」

（正直言うと、今はしばらくここで安静にした方が良さそうだな、あの腸狩りという糞女に魔法そして加護という物……………もし仮に魔法と加護のセットの野郎が出てくるとする、そりゃあもう『多重能力者（デュアルスキル）』とかわんねえ……………ここも甘くねえか）